

■ 会議結果報告書 ■

会議名称	第5期 札幌市子どもの権利委員会 第3回委員会
日時・会場	平成31年3月13日（水）17：00～18：35 バスセンタービル1号館4階大会議室
出席委員	12人出席

議題等	概要等
議題	<p>○平成30年度子どもに関する実態・意識調査結果（速報）について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料1～3に基づき、事務局より説明。</li> </ul> <p>○質疑・意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの権利の認知度の上昇と、子どもアシストセンターの認知度の低下との関連性について、どのように解釈したらよいか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>－事務局：権利の認知度が上がれば、同様にアシストセンターの認知度も上がってしかるべきだと思うが、今回アシストセンターの認知度が下がった点について、原因分析はできていない。</li> <li>－委員：権利意識が高まるということは、実態として権利が保障されていることと、権利が危ぶまれたときに救済手段があるかどうかということが表裏の関係。今回は救済手段であるアシストセンターの認知度が下がっており、権利の認知度が上がったことだけを捉えて評価することはできない。</li> <li>－委員：中学校では、パンフレットや授業等による学習効果は出ているが、子どもたちの中で子どもの権利とアシストセンターがあまり結びついていないのではないか。</li> <li>－委員：権利意識は小学生でも高まっているが、権利が危ぶまれたときに、子どもたちはアシストセンターまで考えなくても、友達や親、先生など身近なところに相談できているのではないか。</li> <li>－委員：アシストセンターを知っていても電話できない。何でも相談できるとなっても、実際に相談したら何と返ってくるのか怖い。</li> <li>－委員：ふだんはLINEで話すので、電話をかけることになじみがない。</li> <li>－委員：最近、アシストセンター以外にも、児相や家庭児童相談室など相談できる場所があり、相談先が分散しているのではないか。</li> </ul> </li> <li>・子どもの権利を何で知ったかについて、「学校で配布されたパンフレット」の割合が子どもと大人でかなり開きがあり、大人の割合は低い、クロス集計では保護者は子どもを通じて学校から情報を得る機会が多いという結果が出ている点について、どのように解釈したらよいか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>－事務局：「学校で配布されたパンフレット」の割合は大人18.3%であり、この中には、子どもがいる・いないなど色々な方が含まれている。クロス集計で、例えば中学生の子どもがいる方を見ると、割合は64.2%と高くなる。小学1年生と4年生、中学1年生の全員にパンフレットを配っているの、それを子どもが家に持ち帰るなど、保護者としても接する機会はあると思っている。</li> </ul> </li> </ul>

- ・今回の調査では比較的問題を抱えていない方が回答している傾向にあるとすると、回答していない子どものほうが色々な問題を抱えているのではないかと。こうした子どもたちの実状等について報告書で何か言及されるか。  
—事務局：報告書はあくまで回答ベースになるが、実際に困難を抱えている子どもの声がアンケートには反映されていないところについて、今後の取組としてはそうした子どもに対してどのような支援が可能なのかも含めて考えていく必要がある。
- ・調査結果では地域との関わりが少ない。実際に地域で色々なことをしているが、子どもが自主的に考えて地域を動かしているという行事はない。今の子どもは忙しく、地域の行事に子どもが集まらない。  
—委員：大人がつくった枠組みに子どもを誘導するというやり方は、もはや時代的に難しい。地域と子どもの関わりでキーワードになるのが居場所であり、大人も子どももいるような関わりの中で、集まった人たちでの自発的な活動が必要になってくるのではないかと。
- ・子どもを取り巻く課題として特に重要と思うものについて、家庭環境やいじめ、インターネットなどは関連してくる部分がある。一人の回答者が複数回答の中でどのような傾向で選択しているかについて、分析しているか。  
—事務局：現状していない。分析方法等について検討する。
- ・自己肯定感をどのように評価するかは非常に難しい。例えば「不安や悩みを抱えこみやすい」という項目が、自己肯定の大きな要因として左右しているかどうかを分析することは可能か。  
—事務局：「不安や悩みを抱え込みやすい」という項目については、大人から見た子どもの印象であり、子ども自身に聞いた自己肯定感の項目とは回答者の主体が異なるので分析は難しいが、子ども自身の意識を聞いている他の類似項目である程度傾向を見ることはできる。実際に、自己評価がポジティブな子どもであれば、比較的相談相手がいる、悩み事が少ないなど、大まかな傾向はクロス集計でも出ている。
- ・子どもの権利が大切にされていると思う割合について、前回調査から大人は横ばい、子どもは上昇となっているが、大人が上昇傾向にないことについて、どのように考えればよいか。  
—事務局：昨今、児童虐待やいじめの問題が大きく報道されており、こうした社会情勢も反映しているのではないかと考えている。
- ・相談相手で「友達」を選び、さらに傷つけやすい人でも「友達」を選んでいる人がどのくらいいるのか、クロス集計で把握しているか。  
—事務局：現状把握していない。後日お示しする。
- ・子どもを言葉や力で傷つけやすい人で、「学校の先生」が予想以上に多かった。子どもにとって学校の先生の力は非常に大きいので、この結果を真摯に受け止めていただき、助ける側に回っていただきたい。

	<p>ー委員：「学校の先生」の割合は子どもだけで言うと8.5%だが、大人はその5倍以上。学校現場としては、生徒だけではなく保護者とどう関わってきたかということも振り返って、求められる存在になっていかなければならない。</p>
その他	<p>○事務局からの連絡事項</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・次回委員会は5月頃に開催予定。</li></ul> <p style="text-align: right;">以上</p>